

Title	筑紫の旅
Sub Title	A travel in Tsukushi (筑紫)
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.1 (1959. 4) ,p.94- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590400-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

筑紫の旅

松本芳夫

この一篇は太平洋戦争さなかにおける紀行文で、戦後の今日とは萬事につけいささか異なるであらうけれども、私にとつては忘れがたい旅であつた。

昭和十八年十二月二十六日

門司驛についたのは午前九時すぎで、約一時間の延着である。これは朝六時ごろ山陽線の厚東驛で何か事故があり、嘉川驛で約一時間の停車があつたからである。プラットホームは寒い西風のふきさらしで、おもはず外套の襟をたて、足ぶみをせざるをえなかつた。つぎの鹿兒島行急行列車も約四十分おくれてやつてきた。實は所用のため一日はやく東京を出發した自分は、昨夜大阪驛でこの列車にのりあはし、同行するN君と相會するはずのところ、生憎急行券がえられず、やむなく普通列車で

一足はやくここにきて待ちあはせたのであつて、同列車から降りたN君をせきたて、いそいで日豊線にのりかへた。客車もすいてをり、また暖くもある。十一時中津に下車。人力車にのつて福澤先生舊宅をおとづれた。藁葺平屋建の母屋と、先生が少年時代に勉強したといふ土蔵と、道をへだてて、遺品や寫眞を陳列してゐるコンクリート建の紀念館とがある。この粗末な舊宅をみると、そぞろに封建時代における下級武士の生活がしのばれるとともに、明治文化建設の偉人の生家として感慨なきをえず、また日本家屋の永久保存には、破損に對してとくに注意を要することが感ぜられる。

十二時十七分中津驛發。四時すぎ臼杵について、驛前の富士美屋旅館に投宿。町にでてみたが、格別みるべきものがない。

十二月二十七日

七時四十分驛前から省營バスで深田の石佛見學にでかけた。約二十分ばかりして深田石佛の入口で下車。本街

道から左方の小道に入り、右手の田圃のなかに立つ石の鳥居をながめながら、小川にそうてしばらくゆくと、左右の流れの合流點に一軒の茶店がある。その老婆の案内で、まづ左方の流れにそうた山よりに立つてゐる鎌倉時代のものといはれる寶篋印塔の日吉塔からはじまつて、仁王像、眞野長者夫妻の石像、蓮城法師石像、ついで田圃をへだてて眞向ひの山腹にある大日山十三佛群像、日吉神社、隠れ地藏、さらに谷間の丘腹にある堂ヶ迫上群像と同下群像といふ順序で、この磨崖石佛の巡禮をした。

これらの石佛は概して破損がはなはだしく、それは大友宗鄰の廢佛毀釋のためと言はれたりするが、また自然の風雨のためにもよるのであつて、ことに平地にたつてゐる仁王像のごときは、脚部下半が土中に埋設し、全身の磨滅がはなはだしくて、面妖怪奇の感じさへする。大日山十三佛群像は大日山東南の中腹の斷崖をけづりとり、そこに十三體の群像をぎざんだ規模最大のもので、しか

も樹木のためにおほはれて幽暗神秘の感をただよはすものであるが、しかしその破損がはなはだしく、そのうち中尊の大日如來像は高さ一丈にも及び、深田石佛中の最大の巨像であるけれども、惜しいことに頭部が落ちてゐる。しかしその頭部は附近の石の上につてゐて、その顔面のごときはほとんど完全であり、細ながい眼、しまつた口、ゆたかな頬など、氣品のある相貌を呈してゐる。深田石佛中の最高の傑作といはれるのは、堂ヶ迫下群像の阿彌陀三尊像であつて、向つて左方の勢至は大分破損してゐるけれども、中尊と右側の觀音とは、ことにその上半はほとんど毀損磨滅はなく、中尊の豐滿雄偉な相貌と、量感ゆたかな堂々たる體軀とはまことにすばらしいもので、平安中期の作といはれるが、單に豐後の數多い石佛中の最傑作であるのみならず、わが國の石佛のうちの最も完好のものといはれてゐる。ただ周圍が冬枯のためであつて、あまりに開放的であるので、神秘感にとぼしいうらみがある。

この深田石佛は、その規模といひ、その美的價值といひ、わが石佛中の最もすぐれたものであるのみならず、この製作者について種々の傳説がからまれてゐるのは興がふかい。欽明朝の蓮城、敏達朝の日羅、元正朝の仁聞等の傳説があり、ことに蓮城と眞野長者炭焼小五郎の物語は、長者譚として著明であつて、案内の老婆もこの物語をはじめとして、峰の水神、その他村のくさぐさのことをきかせてくれた。しかしこれらの諸像の製作は、大半平安時代から鎌倉時代にわたるといはれてゐる。さうしてかかる石佛が何故豊後に多く製作されたかについて、濱田耕作博士は適當な石材凝灰岩が豊富に産出するからであると言はれてゐるが（豊後磨崖石佛の研究、一二九―三〇頁）、しかし凝灰岩もしくは阿蘇溶岩は、單に豊後のみではなく、博士ものべてゐるやうに、筑後、肥後などにおいても豊富であつて、これらの地方では古墳の棺槨や、石人石馬の彫像や、横穴の製作などに使用されたのであるけれども、豊後におけるやうに數多い石佛の發生をみなか

つたのであるから、單に材料の豊富といふ外的原因のみではこの問題は解決されないであつて、當地方における佛教の活動、それにともなふ佛像彫刻の技術の傳播といふやうな、他の原因をも考察する心要があるとおもふ。

清澄な大氣につつまれた田舎の田の畔や、山裾の細道を、老婆の興ふかい話をききながら歩いたのは、實にいい氣もちであつて、かつてフランスのドルドーヌ何谷のレゼジエにおけるフォン・ド・ゴームの舊石器時代の洞窟を見學した時のことがそぞろにおもひだされた。

ふたたび臼杵にひきかへし、十二時四分發の汽車で大分市にきて豊肥線ののりかへ、午後三時發、阿蘇に向ふ。廣瀬中佐や田能村竹田、直入等の生地竹田をすぎるころから、いよいよ高原にも夕暮がせまり、かすかに晴れた西空から夕陽がかがやくかとおもふと、阿蘇山であらうか、それとも祖母山であらうか、夕雲におほはれた眞黒い山容が汽車の前面にたちふさがつてくる。宮地については六時二十分。すでに暗くなつた道をバスで神社前下車、

寶來館に投宿した。

十二月二十八日

現在どこの宿でも飯はもりきり一杯であるのに、昨夜の夕食でもさうであつたが、今日の朝食においても、宮地の宿では戦前通りに女中がそばに侍つて、白い御飯をいくらでもよそつてくれ、その上晝食のおむすびまでつくつてくれたのは、おどろきとともに有難いことであつた。熊本縣は物資がゆたかであるとは、かねてきいてゐたが、なるほどとおもはれた。しかしわれわれの腹は、統制のために食事の量がほほ一定してゐて、大食するわけにゆかなかつた。この宮地は、わが妻の父の出身地であるけれども、今は全く縁故がない。神武天皇の皇孫健甞龍命を祭神とし、かつては肥後國の一宮として歴朝崇敬のあつかつた阿蘇神社に参拜した後、午前九時十分宮地驛發、高森に向ふ。左方には根子岳の奇峰、高岳の高峰をはじめ、中岳、往生岳、杵島岳、烏帽岳などの阿蘇山を、右方にはその外輪山をながめながら、その間にひらけた

盆地を汽車が走るのであつて、走水驛から立野驛にいたる間において、鋤段耕作のうるはしい曲線の展開がみられた。

立野驛でのりかへ、阿蘇山の南側にでて高森についたのが十一時ごろ。同五十分満員のバスがこの山坂の町を出發して、阿蘇の外輪山をいくうねりしながらのぼりだした。車窓からながめる阿蘇の偉容はすばらしい。やうやくにしてのぼりつめ、下りになつてしばらく快走をつづけたバスが、木郷といふ部落の小川の橋のつめにさしかかつたところ、突然故障をおこして動かなくなつてしまつた。めざす高千穂町三田井までは八里とか十里とかいふ山道であるから、到底歩くわけにゆかず、夕方まで次のバスくるまで待たざるをえなかつた。今朝宮地の宿でむすびをつくつてもらつてゐたので、幸ひ絶食の厄をまぬかれたけれども、一時ごろから五時すぎまで、この淋しい山峡にとどまらざるをえなかつたのは、退屈でもあり、寒くもあつた。暮れせまるころ、やうやくにして

きたバスにのりかへ、三田井についたのは七時すぎ。今
國旅館に投宿した。

十二月二十九日

昨夜たのんでおいた自動車は、寒さのために機關がか
からず、八時半から十時すぎまで待つてやつとうごきだ
した。運轉手の説明をききながら、長驅してまづ東北二
里の天岩戸神社に向ふ。屋根に千木をおいた農家の點在
は、他の地方ではあまりみられない古風な趣である。神
社は岩戸川をへだてて東西の兩宮にわかれ、天照大神と
大日靈貴尊とをあたかも別神のごとくにまつている。
ことに西宮においては、大神のこもられたといふ岩屋が、
川をへだてた向側の斷崖にあつて、これを遙拜すること
になつてをり、神官の話では、生ひしげつた樹間に隱見
する岩屋にいたらうとするものは、かならず途中で墜死
するといふことであるが、神體を奉安しないで山そのも
のをまつるのは、大和の大神神宮以外にはないのである。
自動車はひきかへして、神武天皇の兄第四柱の生誕地

とつたへられる四皇子峯、老杉のそそりたつ眺望のよい
高高原、ヒコホホニニギノミコトその他數神を合祀する
櫛觸神社、老櫛の根もとにこんこんと清水のわく天眞名
井、高千穂十八郷八十人社の宗社で、三毛入野命等を奉祀
し、秩父杉といふ老杉のそそりたつ高千穂神社などをめ
ぐり、最後に峽谷の美をもつて知られた高千穂峽を見た。
宿にかへつて中食をしたところ、よほど物資のゆたかな
ところとみえ、牛肉の煮付がついてをり、昨夜の夕食に
は湯氣のたつ大きなピフテキが二の膳についてゐたが、
今の時世にかういふ豪華な食事をとりえられるのはまこ
とに珍らしいことで、おのづから気分もゆたかになった。
一體天孫降臨の傳説地として、この高千穂と南方の霧
島山とどちらがふさはしいかといふことは、古くから論
争され、それぞれよりどころがあるために、本居宣長の
ごときは、まづこの高千穂に天降つて、しかるのち霧島
山にうつられたのであらうとの妥協説すらたててゐるの
であるが、文献においては、後者が鎌倉時代の塵袋所引

の日向風土記にでてゐるけれども、しかしその風土記が信用のできないものと言はれてゐるに反し、前者は釋日本紀や仙覺の萬葉抄にひかれる日向風土記にあらはれてゐる點が、有利であるといはれてゐる。しかしそれはとにかく、この高千穂の地勢をみるに、西方は五ヶ瀬川、東方は岩戸川が流れ、それが合して南流してゐるが、いづれも實に浸蝕のふかい、ほとんど直角をなすやうな斷崖の峡谷をなし、四周は高い連山をもつてかこまれた盆地であつて、

大和は

國のまほろば

たたなづく

青垣山こもれる

大和し

うるはし

という歌をおのづからにして想起せしめるやうな、うるはしい天嶮の要地であり、しかも石器の豊富なことは宮

崎縣下第一で、横穴の存在も多數であるといはれるから、天孫降臨にからまる傳説のうまれるのも、うべなりとおもはれるところである。

午後二時バスで出發、五ヶ瀬川にそうて下り、四時半延岡着、吉野屋に投宿。宿の子供に案内され、城址にのぼつて俯瞰し、また薄暮市中を散歩した。

十二月三十日

九時五十分發といふ汽車が延着して、十時二十二分延岡發。雨にけぶる海岸を南下するにしたがつて、わが郷里紀州の海岸をおもはせる風景が展開する。十二時二十五分廣瀨驛でのりかへ、同五十五分妻驛着。大阪屋旅館に荷物をおいて、ふたたび雨中の町を歩き、郷土館を訪れた。町から數町ではづれたところであり、鬱蒼と生ひしげつた森のある都萬神社の近くである。生憎かかりの人が不在のため、説明をきくことができなかつたけれども、留守居の子供に開けてもらつて、西都原の古墳群の出土品や、この地方發見の石器時代の遺物、國分寺の瓦

などの陳列品を參觀した。

N君は今朝來下痢のため宿で休養し、自分は午後三時十分發の汽車で、妻線の最終點である杉安驛にでかけ、遠縁にあたる同郷人の久司氏をたづねた。薪炭材木商とばかりおもつてゐたところ、雜貨商をも營んでゐて、歲末のため店頭は賑つてをり、突然の訪問者を夫妻ともはじめは怪訝さうであつた。相見ざること三十年であるから、それも當然である。しかし夫妻とも大いによろこばれ、昨夜搗いたといふ餡入りの白い餅を焼いてくれたり、夕食には鶏を調理して歡待してくれた。六時三十分發の汽車で妻町の宿に歸つた。

十二月三十一日

朝のうち霧がたちこめてゐたが、しだいに晴れて上天氣になつた。午前九時ふたたび郷土館をおとづれたが、大晦日のためか、かかりの人は今日もきてゐなさい。ただちに西都原の古墳群にゆく。郷土館から西方に歩いてゆくと稚子池があり、それより坂をのぼつた西方の臺地

一帯に、東西約十町、南北約三十町にわたつて、大小およそ三百基にちかい古墳が點在するのであつて、四周に連山を遠望する見晴のよい高原で、國原という感じのする、いかにも古代人のよろこびさうな地勢である。ことに圓墳ながら巨大な玄室、羨道を有し、しかも周邊に高さ三米ちかい土壘を環狀にめぐらした鬼の岩屋古墳の墳丘からする眺望はすばらしい。ニギノミコト及びその妃コノハナノサクヤヒメの御陵とつたへられ、御陵墓參考地とされてゐる男狹穗塚と女狹穗塚とを見た後、もってきた道をひきかへし、稚子池附近から南に數町歩いて日向國分寺址を訪れたが、金堂と講堂との址とおもはれる土壇址と礎石とがみられた。

十一時半妻町にひきかへして午食。十二時バスで妻町を發し、一時半宮崎市着。驛前の新日州館に宿を定めて市中見物にでかけ、まづ八紘臺をおとづれ、ついで神武天皇を祭神とする宮崎神宮に參拜、さらに徴古館を參觀した。縣内の各地からえられた石器時代遺物や古墳出土

品をはじめ、種々の史料を陳列してをり、西都原でみることをえなかつた同地の阿野家所藏の王朝時代の兒湯郡印も陳列されてゐる。市中最も繁華な橋通を散歩して歸る。はるばる筑紫の南にきて、わが古代史をしのびつつ、苛烈な戦の年を送るといふことは、感慨ひとしを切なるものがある。

昭和十九年一月一日

午前九時南宮崎驛から遊覽バスで東南四里ばかりの青島見物にでかける。市中をではげれると、はるか北方の清澄な空に霧島山の雄姿を仰ぐことができる。幕末の儒者安井息軒がこの附近の清武村の出身であるが、丈のひくい醜男であるため縁談をことわられたが、その相手の女の妹が絶世の美女でありながら、みづからすすんで彼にとつぎ、内助の功がはなはだ多かつたといふ美談などを案内嬢からきいてゐるうちに青島につき、熱帯樹の生ひしげつた下で記念撮影をなし、青島神社に参詣した。この附近から南方の海岸にかけて、隆起した海床が波状

形に浸蝕されてゐる奇岩があり、めづらしい景觀ではあるけれども、磯としての面白味ははなはたとぼしく、かへつて單調の感がある。

バスはさらに八里南方の鵜戸に向ふ。右手は山を負ひ、左手は海にのぞみ、いたつて暖い。昔宮崎では、新婚の若夫婦は手に手をとつてこの七浦七峠を越えて鵜戸神宮に参拜し、歸途盛装した花嫁を馬にのせて花簪が手綱をひき、親戚一同途中まで出迎へる風があり、これをシャン馬といつたさうで、『げに文明はローマンスを破壊すると申しますが、かういふゆかしい風習はいつまでも保存しておきたいものがあります』といふ案内嬢の説明をききつつ南下し、やがて鵜戸につく。鵜戸神宮はウガヤフキアヘズノミコトを祭神とし、社殿は石段を下つた東麓の巨大な岩窟内にあつて、渺茫たる太平洋をのぞみ、怒濤岩をかむ壯觀がみられるが、参拜者は二の鳥居から履物をぬいすすまねばならない。丁度若い巫女が舞をしてゐるところであつた。

三時すぎ宮崎歸着。四時發の汽車にのり、六時すぎ霧島驛下車。満員のバスは暗い山道をひたのぼりにのぼり、霧島温泉の林田旅館に投宿。ひろいだけで寒々とした部屋に、まづい料理も、不意の客なればせんなし。ただ湯だけは豊富で暖くてよろし。

一月二日

九時バスで下山、途中停車してヒコホホニギノミコトをまつる霧島神宮に参拜。社前から遠く南方の櫻島や開聞岳がのぞまれるけれども、この眺望をほしのままにする餘裕がない。霧島驛から汽車にのり、隼人驛下車。驛から北方六町ばかりにあつて、ホホデミノミコトを奉祀する鹿兒島神宮に参拜。さらに驛から南二、三町へだてた田圃のなかに立つ隼人塚をみる。奈良時代隼人の死靈をなぐさめるためにたてた供養塚であつて、ほぼ方形の封土の上に三基の石造多重塔と四天王像とがおかれてあるけれども、いづれも破損磨滅がはなはだしい。一時六分發の汽車で鹿兒島着、ついで三時五十八分發の汽車

で指宿に向ふ。

六時すぎ着く。すでに淡暗くなつた驛前で乗合馬車にのつたが、これも超満員で、自分は御者臺に座して提灯をもたさせられ、御者は徒歩で馬をひいて案内してくれしたが、めざす摺濱の宿は満員の故をもつて、豫約をしてゐないじぶん達數名はすげなく斷わられた。附近の宿もすべて満員のため、さらに馬車を驅り、御者の盡力でやうやく湊の高松屋に投宿することができた。

一月三日

午前八時宿をでて、字、丈六の石器時代遺物包含地見學にゆく。驛の前から線路にそうて數町南に行つた川ぶちのところであつて、最下層から縄紋式土器が出土し、その上に厚い火山灰の層があり、その上に彌生式、ついで齋瓮式土器の層があり、その上に泥流岩、その上に火山灰の層があつて、最上層の表土につらなるところの縦断面が露出してゐるといはれるのであるが、それらしい地層の一部分をみることできたけれども、全體にわた

つて完全にみられうる地點をつひに見出すことのできなかつたのは、はなはだ残念であつた。フランスのレゼジエにおいては、舊石器時代の遺跡の断面の上に金網をはつて、地層の變化を明瞭に示したところがあつたが、指定史蹟とする以上、さういふ施設ができないものであらうか。

指宿の驛や沿道において、應召か入營であらう、さかに歡送してゐたが、旗をふつて軍歌を合唱する方法とは別に、三味線、太鼓をもつて、おはら節のやうな民謡をうたつてゐるのをみたが、郷土色のゆたかな歡送法をおもしろくおもつた。

十二時十分鹿兒島驛着。山下町の小田旅館に宿を定め、ただちに市中見物にでかけた。まづ驛前からバスで磯の尙古集成館にゆく。薩藩關係の史料を蒐集陳列したものであるが、ことに幕末から維新にかけてのものが多く、島津氏が西洋文化の採用に如何に熱心であつたかを示してゐるのが興味ふかい。それより南州神社、及び南州の

墓に參拜したが、現下の時局に際して、敬天愛人の至誠の士を思ふこと切なるものがある。さらに南州終焉地の附近から城山にのぼつて市街を俯瞰した。眼前には櫻島をひかへ、はるか右方に開聞岳をのぞみ、眺望絶佳である。山を下つて照國神社に參拜し、天文館通を散歩した。

一月四日

午前八時に宿を出て、十時の汽車でたつつもりであるところ、八時四十五分發の臨時列車があり、三等客車ばかりであつたが、めざす熊本へは約一時間はやくつくだ、それに乗車。途中心配した午食も出水驛で弁當をもとめることができ、客車も混雑せず、萬事都合であつた。午後三時ごろ熊本着、驛前の惣進館に宿をとり、ただちに外出してまづ應神天皇を祭神とする藤崎八幡宮に參詣し、ついで本妙寺にゆく。寶物館には重美となつてゐる安南國書大都統官書などがあつた。それより市中最も繁華といはれる新市街を散歩した。

一月五日

熊本市の西郊約二里にあつて、彩色彫刻畫のほどこされた千金甲古墳を見學するつもりであつたが、生憎雨になつたので、豫定を變更し、九時十分發の汽車で北上、十一時十五分高瀬町驛でN君は筑後河の灌既状態を視察するとて下車、十日間の同行もここに袂をわかつにいたつた。

十二時前久留米驛着。驛前の観光案内所で旅館の斡旋をたのんだところ、今日は入營、應召のため、一流どころはすべて満員とのことで、葛屋といふ至つて小さな旅館を紹介してくれたが、しかし部屋は奥まつた二階で閑靜であり、すべてさつぱりと小奇麗で、かへつておちついて甚だよろし。荷物を宿において、ただちに高良山に向ふ。驛のそばから御井町ゆきのバスにのり、終點下車。約半里のぼつて高良玉無命を祭神とする高良神社に參拜。社務所で神籠石の所在をたづね、社殿から奥の院にいたる口でその一部を見、ついで下山の途中高良山歴代座主の墓所を経て大學稻荷神社にいたる附近から下山

の道路にそうて一部をみる事ができた。

神籠石はわが考古學界において、かねてから靈域説と山城説とにわかれて論争されたものであつて、いまなほ歸結をみないやうであるが、この高良山の神籠石をみると、列石は自然石ではなく、長さ一米内外の切石で、二千五石米にわたつて山腹を環狀にめぐらしてゐる状態は原始的のものではなく、相當技術の進歩をおもはせ、この點において山城説は有利のやうであるけれども、しかしその配置がこの山岳の防壘として果して適當の地點にあるかどうか、吟味の要があるやうにおもはれる。なにしろ筑後平野から遠く有明海にいたるまで俯瞰される眺望絶佳の地であつて、しかも高良神社を奉祀するといふ宗教的意義を無視できないとすると、單にこの高良山の神籠石だけについていへば、山城説でも、靈域説でも、相當の論據があるやうであるが、數ヶ所の遺跡のうち、ただ一つをみたのみでは何とも斷言できない。

ふたたびバスで市中にかへり、明治通りを散歩した。

一月六日

八時半宿をでて驛から近い京町の日輪寺をおとづれ、境内の古墳を見學した。前方後圓墳の後圓部に石室があつて、その側面の下方に二重同心圓紋や直孤紋が線刻されてゐるが、朱彩ははつきりしない。この古墳の出土品のうちに頸飾などがあつて、それらは豪族のものといふよりは、皇族のものといふべきもので、おそらく仲哀天皇の御物ならんといふ老僧の説明をききながして辭した。微雪ふりきたる。

九時二十五分發の汽車で鳥栖驛着。約四十分待つて長崎行きにのりかへ、しばらくしてやつと座席をえてよるこんだところ、豈はからんやこの汽車は佐世保ゆきで、肥前山口驛でのりかへ、約一時間待ち、驛前の飯屋で殺倒する客のために主人である爺さん婆さんのあげる悲鳴をききながら午食をすまし、十二時四十分發の汽車で、午後六時四十分長崎驛着。雨のなかを人力車で萬歲町の上野屋に投宿。夜は塾の文學部史學科を出て、造船所に

勤務してゐる三浦君來訪。

一月七日

長崎はかつて昭和十四年一月、中支旅行の歸途たちより、諏訪神社、崇福寺、出島和蘭商館址、大浦天主堂、福澤先生に關する遺跡などを訪れたことがあり、これで二度目の來訪である。午前中鳴瀧のシーボルト宅址、興福寺、崇福寺などを見學、午後縣立圖書館をおとづれ、塾の文學部出身の先輩である館長増田氏に面會、長崎に關する資料や史籍をみせてもらひ、ついで東洋一といはれる浦上天主堂を見た。

終日微雪がふつたり、やんだり、寒さはなはだし。物心兩方面とも暖かみなきところのごとし。夜十時半の汽車で北上。

一月八日

朝七時半門司驛着、今夜の急行券を購入後博多にひきかへし、驛の近くの承天寺をおとづれて、法堂の本尊である國寶の釋迦三尊像と、おなじく國寶の高麗傳來の銅鐘

とを拜觀した。それより九州鐵道で都府樓前下車。太宰府址にゆく。大門、中門、東廳、西廳などの遺址の礎石が田圃にとりまかれて残存し、それらの後方の一段たかくなつた土壇上に正廳址の礎石が三十六箇整然とならんで、ありし日の偉觀をしのばしめる。その西側に古瓦參考館があるけれども、閉鎖して誰もみえない。ついでその東方數町の戒壇院をおとづれて、本堂に安置された國寶の盧舍那佛座像を拜觀、さらにその東隣の觀世音寺をおとづれ、住職の案内で本堂及び阿彌陀堂に安置された多數の佛像を拜觀したが、いづれも平安時代から鎌倉時代にかけての優秀作である。かかる國寶が單にここばかりでなく、空襲の急險の多い北九州においてそのまま放置せられ、ほとんどそれに對する適策の講ぜられてゐないのは、やむをえないことと言ひながら、不安なきをえない。なほ同寺には、國寶として狗犬、菅公が『都府樓纒看瓦色。觀世音寺唯聽鐘聲。』と詠じた銅鐘、舞樂面、天蓋光心などがあるけれども、後の二者は東京帝室

博物館に出品中でみられず、その他重美の太宰府址蓮華唐草文塼や、水城水門の埋木、各種の宋代青瓷破片などがあつた。それより田圃の細道を東に歩いて太宰府の町に入り、太宰府神社に參拜。本殿が桃山時代の雄大豪華な趣きがあるに對し、その前面の池の反橋の際にたつてゐる志賀社は、きはめて小規模のものであるのに、その構造が複雑で、和様、唐様、及び天竺様を併用した室町末期のものといはれ、ともに國寶でありながら、よき對照をなしてゐる。本殿の背後の徴古館には附近出土の石器時代遺物や、その他の考古品が陳列されてあり、別に寶物館もあるけれども、さしたるものもないやうである。福岡にひきかへし、汽車で戸畑に下車。從弟の濱口をたづねたところ、昨日打電しておいたので今朝から待つてゐたとのこと、河豚料理を馳走になり、夫妻子供たちに門司驛まで見送られる。八時半の汽車が約半時間延着し、しかも超満員で、やうやく廊下に鞆をすゑ、その上に腰をおろして、うつらうつらしながら歸途についた。